

介護する人  
して貰う人



Harada Ryo  
原田 涼

目次

装丁・イラスト 溝上なおこ

障害者になった朝	6
病院生活の思い出	12
さまざまな人々	17
障害者施設に入る	26
忘れられないこと	32
人の縁の不思議	41
「白い巨塔」をかいま見る	49
殺伐としてきた世の中	53
ニュースを見て思うことなど	58
介護実習について	67
神様が教えてくださる	70

## 障害者になった朝

わたしが障害者になったのは昭和五十年四月四日の朝でした。会社へ勤めるため家を出てすぐ、団地の階段を降りるところで、足をくじいて降りそこない、手すりの無いところだったので、一気に下まで落ちてしまいました。起きあがるうともがいったり、必死になって動こうとするのですが、びくともしません。まさかそれ以後、生涯寝たきりになるとは、思いませんでした。

ちようどその時オイルショックで仕事も少なく、土曜日は毎週休みで、事故を起こしたのは金曜日でした。ですからその日だけ休めば、来週から出られると思います、一日だけの休暇届を電話してもらい、救急

車をたのんで、タンカに乗せられたまでは覚えていますが、後はわからなくなり、気がついたら病院のベッドに寝かされていました。

なにもかも検査がおわったそうですが、どこが悪いのかわからないとのこと、治療のすべがなかったそうです。脳神経外科専門のいわば個人の病院だったのです。いつまで待ってもこれといった治療もなく、なんのアドバイスもなく、いらいらして日を過すだけでした。

個人的に近くのマッサージ屋さんをきてもらいリハビリ的な訓練をしてもらい、みだりに日を過ごしていました。これではだめだと痺れをきらし、院長にどこかほかの病院を紹介してほしいと頼み、やつと枚方市の星が丘厚生年金病院を紹介してもらい、昭和五十年九月一日に入院できました。

やはり大きな病院は違います。あくる日から早速いきばきと全身の検査が始まり、やっとわかりました。頸椎四番の運動神経を圧迫していたのです。そこで軟骨を削らなければいけないことになり、早速手術することになりました。

その手術は昭和五十年十月六日に約六時間かけて行われました。手術後に先生が「受傷してから手術を受けるまでに半年以上経っているので、手術は成功し、これ以上は悪くはならないが、歩くのは無理です。せめて三ヶ月以内であれば、杖をついて歩くぐらいにはなれたかもしれません……」とおっしゃいました。

病室で気がつくと首を動かせないように（首を動かしてはいけな

かった為）両耳の横に砂袋を置かれ、しばらくはそのため耳も聞こえにくかったです。手術後はガスが自力で出せるようになるまで、食べ物はいっさい口にしないように、点滴で栄養と水分を補給し一週間経ってやっとガスができました。

大部屋へもどり久し振りに、ゆるいお粥を口に入れて貰った時のおいしさは、なんとも言えないほど美味しくて、その味わいは、しばらくは忘れることが出来ませんでした。傷の回復も順調にすすみ、ぼちぼちながら良くなってきたので、少しずつ無理をしない程度に訓練が始まりました。最初は起立台で起き上がるのですが、八十度くらいに起こされて久し振りに自分の足を見た時はすごく怖かったです。（前に倒れるのではと思った。しっかりした でっかい台に縛り付けてあるのです）

慣れた頃に今度はマットの上で足の曲げ伸ばしの訓練です。自分で伸ばそうとするのですがびくともしません。リハビリの先生にして頂くのがとても痛くて、初めは悲鳴を上げました。恥ずかしいと思いましたが、まわりも皆同じようにわいわい言っているので、安心しました。

それにつけても早く訓練なしにならないかと思ったり、自分のためになのに頑張る気持も、ともすれば弱気になってしまふのです。その上にOTと違って、おもに手を使う訓練があるのですが、これがまた、すごく力があるのです。

訓練室へいくのに自分で車椅子をこいで行くのですが、なかなか前に進みません。五メートル進んでもまだ訓練室にはほど遠く、目の前

の目的地がそこなのにつきません。手をみると皮がやぶれているのです。力のない者にはよくわかりましたが、床が平らなようですが、わずかながらでこぼこがあつて、手をはなすと車椅子が自然にバックします。ゆがみの差なんてほんの些細なもので見た目には分からないのですが、力のない私にはすごく体力がいります。家政婦さんが気を使つて、なるべく手をださないで見守つて下さるのですが、「おばちゃんお願い」と助けてもらいます。

優しく気のいい人で、本当の親子みたいです。どちらも遠慮しないで言いたい事が言えるので嬉しかったです。だから同室のほかの患者さんに付いている人も、今度来たら私を指名してやと言つてくださるには有難いのですが、(そう度々入院はお断り)と心では思っている

のですが、当時は熱が出てよく入院を、繰り返ししました。でも指名してくれた人がいつも空いているとは限らず、すぐく残念がつてくれ  
ます。

### 病院生活の思い出

よく自分の付いている患者さんの悪口を言っている人がいて厭だ  
なあと思う時があります。他人の和は難しいです。一度だけ訓練に行く  
ときに体がだるくて厭だなーと思い体温を計ると、七度二分あったこ  
とがありました。休むつもりでベッドで寝ていたら、婦長さんがとん  
できて「今リハビリから電話があつたけれど、そんなのは熱のうちに  
入りません、行ってきなさい」と叱られて、仕方なくとにかくリハビ

リ室へいき先生にわけをいって、「婦長さんには言わないでね」とお  
願いをしたら「いいよ」とオッケーがでて、二人でロビーでゆっくり  
休んでいました。たまには部屋から出て周りの人に気を使わなくて、  
落ち着けるのもいいなうと思いました。

リハビリの先生は色白で、華奢で優しい人ですが、それに反して私  
たちの病棟の婦長さんは、病院のなかでも厳しい人で有名ですから、  
ある程度のことでは、皆分かつて下さるのです。とにかく総婦長さん  
とは親友らしいです。

当時は先輩患者さんも事故で腰椎損傷した男性が多く、上半身は  
まったく普通で、元気一杯でした。退院間近には外へ出て美味しいも  
のを買いに行かれるのですが、その時には何時も私たちにも欲しいも